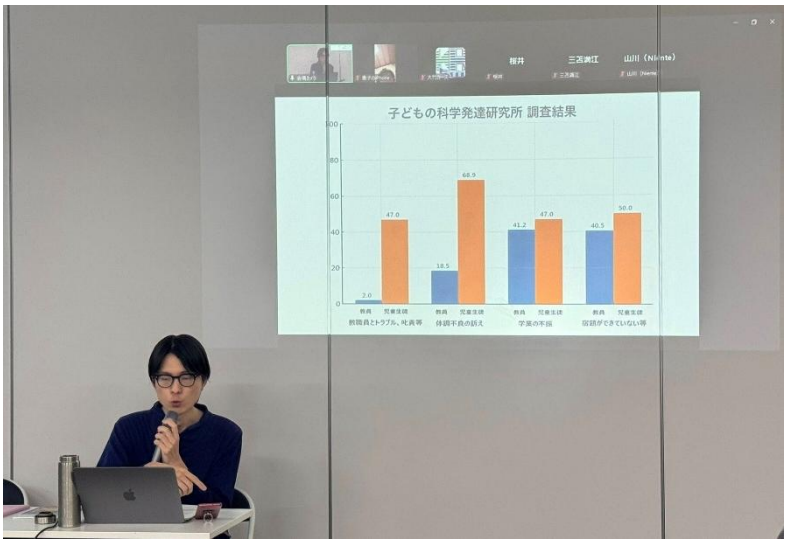
ひきこもり・生きづらさ 社会課題を考える
SHIP!™ メールニュース VOL.5
（2025年9月9日配信）
一般社団法人 SHIP ひきこもりと共生社会を考えるネットワーク

季刊「SHIP!」第2号（夏号）「生きづらさを生み出す正体」発刊・対話交流会

「見えなかったものに光を当てる」8/30 開催「対話交流会」レポート

使う言葉は、誰がどの立場で表現するかで変わる。「不登校」という言葉そのものは、誰の視点から作られた言葉なのでしょうか。文科省不登校調査分析からも、教職員（学校側）、保護者、本人、回答者の立場によって、その要因に大きな差が出ていることがわかっています。SHIP 編集部の喜久井さん（写真右）は、不登校の要因である「教職員とのトラブル、叱責」、「体調不良の訴え」については、教職員と児童では、その認識に大きな開きがあることを伝えています（「SHIP!第2号」48～53 ページ参考）。



また、喜久井さんは、「不登校」という言葉は「子どもを問題化するフィルターになっている」と指摘します。「子どもたちが学校に来ない」という視点から見れば、「不・登校」ではなく、「不・来校」＝「不来校」という表現をしてもいいのではないかという問題提起です。学校に登校できない「子ども側の問題」という視点から、子どもたちが来ることのできない「学校側の問題」に視点を転換した問いかけです。

視線恐怖を持ち、ひきこもりながら、自室で絵を描き続けているクリエイターのこつめたろんさん（49）は、オンラインで声を届けてくれました。第 2 号 SHIP ーART「戦争と登校拒否」に描かれたイラスト、擬人化された動物たちのひとつひとつにストーリーがありました。写真左下で教科書ドリルを頭に乗せる豚の子は、算数が好き。かわうその子は絵が好きで、画用紙を持っている。馬の子も、カバンを持っている。でもみんな学校に行こうとしても動けない。その視線の先に、権力者の息子や、いじめを見物している人たちがいる。決して 簡単に希望が見出せるものではない苦しさや、「いじめ」と言われるものが、後々まで残る、恐怖感や苦しみを語りました。

「誰かをいじめれば、それは、誰かに返っていく。それは社会や他人、子どもに。歪みの連鎖が現代にはびこる生きづらさの正体ではないでしょうか」

こつめさんの言葉は冷静で、描かれる動物たちは、私たちの社会が孕む、残酷さ、愚かさ、理不尽さをまっすぐ訴えかけます。

＜不登校ひきこもり経験者からの感想＞

喜久井さん、こつめさんのお話はすごく良かったと思います。喜久井さんの「不来校」という言葉と、無気力な文科省こそ「不来校の当事者」であるという視点が特に良かったです。こつめさんの「解決」や「回復」を簡単に語れない体験の中でも、その絵からは、自分の中に残る光と、支えになってくれる存在を感じられました。それを直にお聴きできたことに一個人として感謝しております。そして対話交流の時間がまた、自然に感じたことを話せる大事な時間になりました。

＜家族のお立場であり、家族支援にも携わっている方からの感想＞

喜久井さんのお話は、静かな口調で聞きやすい中、 大事なことは ズバッ!と言ってくださいました。知らないデータもあり、さまざまなエビデンスを元にしたとても説得力のある内容でした。大変勉強になりました。ありがとうございました!

こつめたろんさん、大ファンになりました!魂の現れのようなイラストに心打たれました。お話をお聞きしていて、何度も胸が熱くなり、涙が出そうになりました。発せられる言葉のひとつひとつに重みがあって、お子さんの心が理解できない親御さんにも、これは響くと思いながらお聞きしておりました。登壇することを決意してくださり、ありがとうございました!

9月20日から「対話交流会」オンデマンド配信を行います（「SHIP!」購読者限定で無料受付中です）

喜久井さん、こつめさんの声をぜひ、知っていただけたらと思います。

https://shiphiki.jp/2025/05/02/2445/

（SHIP!発行人・コーディネーター　上田理香）

＜SHIP！第２号～読者の感想から～＞

・戦争体験者の家族を持ちながら、ひきこもり・生きづらさを抱えて育った者です。
北村教授の記事に救われました。「親世代が解決できなかった過去の問題が子ども世代を通して現れていたりする側面」を感じています。それは親世代を責めるというより、未来をどうしていったらいいのか、同じ過ちを二度と繰り返さないためにということだと思いますし、そのために決して忘れずに考えていくことなのだと思います。

・何にも役に立っていない自分を責めていました。今も責め続けています。
荒井教授の記事を読みました。「役に立たなきゃ生きてちゃいけないのか」と心で何度も叫びながら読みました。出会えてよかったです。

SHIP！への感想、みなさまのお声をお待ちしています。（下記 QR コードより）

SHIP!公式サイト
またはBASEショップから
詳しくは SHIP! ひきこもり で検索!

「当事者の肉声を伝えることの大切さ」　朝日新聞宇都宮総局「記者サロン」 SHIP！編集長 村田くみ

雑誌編集長・村田さん招き記者サロン

メディアの姿勢巡る議論も

ひきこもり経験 価値がある

朝日新聞宇都宮総局は30日、記者と読者が語り合う記者サロンを開い た。テーマは「ひきこもる人にいま、届けたい言葉」。ひきこもる人と社会とをつなぐ雑誌「SHIP!」編集長の村田くみさんをゲストに、ひきこもり支援について取材する高橋淳記者が対談した。

ひきこもりの状態にある人が全国で146万人いるとされる中、この春、季刊「SHIP!」が創刊。ひきこもる当事者や経験者が記事や写真、イラストを担当する雑誌として注目されている。

高橋記者は「引き出し屋」と呼ばれる悪質支援ビジネスについて取材。「これまで社会だけでなくメディアの側もひきこもる当事者の実像を知らず、社会的な偏見や悪質ビジネスを助長してきた過去があるのでは」と問いかけた。

これに対し村田さんは、当事者の肉声を知ることの大切さを指摘した上で、ひきこもる本人が執筆した記事を紹介。「当事者にはニュースがあり、それに勝るものはない。本人が書いて発信することも決してハードルは高くない」と話した。

その上で、村田さんは「ひきこもっていた期間は実は無駄じゃない。記事を読み、その経験も価値があるものだと気付くきっかけにしてもらいたい」と述べた。会場の宇都宮総局には、読者ら十数人が集まった。参加者からは「村田さんの言葉がうれしかった」などの感想が挙がった。

記者サロンで対談した村田くみさん（右）と高橋記者＝宇都宮市

8 月 30 日、朝日新聞宇都宮総局は、記者と読者が語り合う記者サロンを開き、編集長の村田さんが招かれた。村田さんは、当事者が肉声を伝えることの大切さを強調し、「当事者にはニュースがあり、それに勝るものはない。本人が書いて発信することも決してハードルは高くない」と伝えた。

（詳細は、左図の記事を参照ください）

＜編集部より＞

「SHIP!」はみなさまからの忌憚ないご意見も含めて、多くの声と対話したいと思っています。それが真に生きづらさを生み出すものを考えるために必要なことかと思っています。

【ご意見・感想フォームはこちら】

https://docs.google.com/forms/d/1jcjcvwBNLb-sAnIQNTqiFJdbYEOv4E8r2cJDM1zQQMM/preview

現在制作中の第 3 号は、
「学校問題とひきこもり」が
テーマになります。
引き続き応援よろしく
お願いいたします。

「本人が 10 年ぶりに外に出た陰に…」　　SHIP！発行人・池上正樹

定期的に相談に乗っていた 20 年以上「ひきこもり中」の本人が、電話で「10 年ぶりに外出しました」と話してくれた。夜、住宅地をコンビニ前まで行って戻って来たという。

外に出たのは、10 分余り。両親は「小さな一歩」だと喜んだが、いやいや本人にとっては「大きな 10 分」だ。

「なんで外に出たいと思ったの？」と動機を聞いてみた。

「父親の騒音が消えたから」

相手を変えようとするのではなく、本人が日々感じていたという苦痛を知って、家族が少し配慮と工夫をするだけでも「変化」は起きる。

ただ、そう言いつつも、自ら靴を通販で購入するなどの外に出る準備は、着々と進めていたそうだ。

母親から再びメールが飛んできた。

「今夜、2 度目の散歩に行きました。本当にすごい変化で、主人も涙ぐんでいました」

母親によると、『SHIP!』を渡したら、本人は部屋に持って行って読んでいたようだという。

他の親御さんからも同じようなリアクションの報告を聞いていたので、「SHIP!」に詰まった「たくさんの思い」も、少なからず後押しになっているのではないかと信じたい。

外に出ると言えば、厚労省は今年度、「ひきこもり」状態の人の「自立目的」で共同生活を送らせる民間施設の実態調査を行い、来年度、「引き出し屋」トラブルを防ぐため、支援内容などに関するガイドラインを作ると聞いた。こうした支援内容づくりのプロセスの中に、当事者の視点が十分に盛り込まれるのかどうかにも注目したい。（2025/8/29 読売新聞）

2025年(令和7年)8月29日（金曜日）　夕刊　讀賣

ひきこもり支援施設 調査

厚労省 強引入所や高額請求

厚生労働省は、ひきこもりの人が自立を目指して共同生活を送る民間施設の初の実態調査に乗り出した。本人の同意を得ずに入所させ、高額な費用を請求する「引き出し屋」によるトラブルが起きているためだ。調査結果をふまえ、ガイドラインを作成したい考えだ。

内閣府の2022年度の調査によると、自宅や自室をほとんど出ない「ひきこもり状態」の人（15～64歳）は全国で推計146万人。高齢の親が中高年のひきこもりの子供を支える「80 50問題」は社会課題だ。

ひきこもりの支援を巡っては、自治体や民間団体が相談に応じるなどしているほか、共同生活を通じて当事者に自立を促す民間施設もある。

厚労省によると、これらの施設には設置や運営に関する基準がなく、施設数や支援の実態などを把握できていない。そうした中、ひきこもりの人を強引に連れ出して施設に入れ、十分な支援を行わずに高額な料金を払わせるなどの「引き出し屋」と呼ばれる悪質業者の存在が問題視されていた。

国民生活センターによると、10年ほど前から、業者に数百万円の料金を求められたなどの相談が寄せられている。また、自宅から無理やり連れ出されて監禁されたなどとして、業者に損害賠償を求める訴訟も起きている。

厚労省はこうした状況を踏まえ、施設の実態を把握する。調査は同省の今年度の補助事業で民間企業が実施。既に調査用紙を送付しており、今後、定員や利用料金、支援内容などを確認した上で施設一覧を作成し、標準的な支援サービス例を提示する。厚労省は来年度、有識者を交えて、支援内容などに関するガイドラインをまとめる予定だ。

引き出し屋を巡る民事訴訟で原告側の代理人を務めたことがある望月宣武弁護士は「ひきこもりの当事者や親らの不安につけ込む引き出し屋の手口は悪質。国は早急に実態を把握して、運営基準を設けるなど、トラブル防止策を講ずるべきだ」と指摘している。

＜関連・参考リンク＞

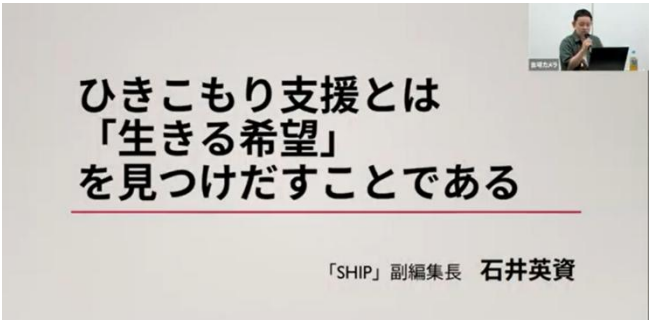
（2024.6.21　Yahoo ニュース　池上正樹）

「ひきこもり支援」を謳う“悪質”民間業者のトラブル続発　国が自治体に注意喚起

https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/4629bd80ffd78d17ae63497e8753b8114607e1fb

【第4回 SHIP！ひきこもり支援ハンドブック講座レポート

「本人の意向を大切にできる支援とは？」～石井さん（SHIP！副編集長）の経験から考えた～



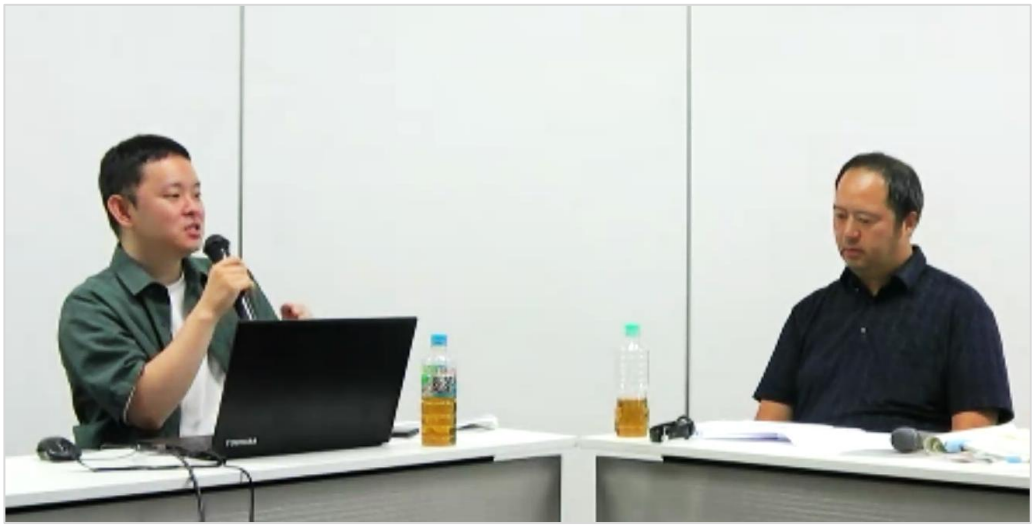
2007 年から大学院在学中に 6 年半ほどひきこもりを経験した石井さん。

困ったときに公的支援制度や福祉サービスを頼ろうした。しかし、2017 年に始まったばかりの生活困窮者自立支援制度は、文字通り生活することに困っていた一人暮らしの石井さんが使える制度（返済のめどが立たない人にお金を貸してくれる制度）ではなかった。残金 500 円まで追い詰められたとき、何も聞かずにお金を用立ててくれた家族（親）の力に最後は救われたと話す。そのほか、自立支援医療や精神障害者手帳など、主に「福祉」分野のサービスを体験したが、ひきこもり状態で働けない人への支援は今ある福祉サービスの寄せ集めのように感じられ、「自分はこの支援を受けると幸せになれるのか？というビジョンは見えなかった」と話す。

自分の中から沸き起こってくる動機
～支援されている感覚はないが、結果的に支援になった～

対話ゲストとして登場した飯田さん（国立市社協コミュニティソーシャルワーカー）は、このように漠然と抱いていた石井さんの「支援者」への不信感を薄めてくれた「人」だった。そこは、国立市社協が当事者とともに運営する居場所「からふらっと」（月 2 回実施）での出会い。ひきこもり状態から人との交流を求めている方、生きづらさを抱える方まで、参加しているみんなが同じ目線・立場で話ができる居場所だ。飯田さんはからふらっと立ち上げへの思いについて、「生きづらさはありつつ、少し何かやってみたいなという人に、当事者スタッフをお願いし協働しながら行っている。支援するというよりも、目の前の人の話を聴きながら、お互いの理解を進めていきたかった」と語る。

＜居場所「からふらっと」ホームページ＞https://www.kunitachi-csw.tokyo/colofulat/



石井さんは、居場所「からふらっと」は、支援されている感覚はないが、結果的に支援になったと話す。居場所や対話の場では、「この人のようになりたい」と思えることがたまにある。自分もこうなりたい、こんな風に生きたいと感じられるのが、「居場所」や「対話の場」の良さと語る。

「自分の中から沸き起こってくる動機があって、この動機に基づいて、私はこういう風に生きていきたい」という状態が面白いのではないか。だからこそ、「自分から受け取りに行ける支援がほしい」。居場所「からふらっと」も同様に、自分の意思で

行きたいから行っている。そこにいる「人」が素晴らしいから行っていると強調する。

支援者が「人」になったとき、漠然とした不信感が薄れていった。「人」というものが、支援を受けたいと思う決定的な要素になるのではないか。

支援者っていうよりも、人としてのその「人」、飯田さんというキャラクターを知って、人としての飯田さんのことを受け入れやすくなったから支援も受け入れやすくなったのだと思う。お互いに相談し合うこともあるフラットな関係になった。話しているうちに人間としての魅力が見えてくる。

「このような支援はどうして生まれるかと言えば、『人』と『信頼』です。信頼に絶対的に必要なものは『時間』でしょう。時間のなかで積み重ねられたものの蓄積です」と石井さん。「飯田さんには言いにくいことや違和感も言えた。完全に納得はしていないけれども、この人が言っているんだったらと思えた。リスペクトがありました」。

また、「居場所」は人間観察の場にもなったという。「こんな人もいる、あんな人もいると新しい発見があって、新しい人と会うこと、新しい出会いを発掘していくような感覚があって楽しくなっていった」。

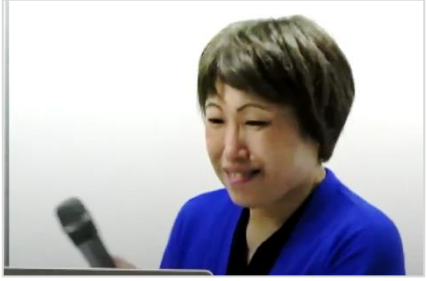
「居場所」や、対話の場、ひきポスや SHIP!などの活動も、支援とは関係のない場が結果的に石井さんにとっての支援になっていった。「私はこう生きたいと『人生のビジョン』を与えてくれるもの（支援）が一番大事だと思っている」（石井さん）。

がんばろうと思える何か～ハンドブック事例の文脈に社会参加以外の選択肢はあるのか～

ハンドブック事例からも本人の生きる意欲について考えた。3つの事例（5・7・12）は、それぞれ、7 年間、14 年間、4 か月と、様々な期間でのかかわりから、支援途絶や拒否が見られている事例を取り上げた。「ふっと気持ちが切れる」とき、反対に「何かがあるからがんばれる」ときもある。そのとき、本人が生きつづけるために必要なものは何かを考え、対話を重ねた。解決につながらなくても「話を聴いてもらえる」こと。自分の好きな何かを買えることの「楽しみ」。目標設定とは、誰の声から設定した目標なのか。意欲とは、社会参加や外出だけにあるのではないのではないか？情報提供の際、本人が自分で欲しい情報が取りに行けるような工夫とはなんだろう？「社会に送り込もうとする支援」以外の選択肢はあったのだろうか？など。

途絶や拒否を示す本人の心情、その思いを受け止めつつ、対話していく時間が大切なのではないか。理解はできないからこそ、「どうしてなんだろう？」と思う。考えの違いがあるからこそ、対話が生まれる。

「人っていろんな生き方、考え方があるんだなということを思い知らされた」と石井さん。飯田さんは、コミュニティソーシャルワーカーとして尽力してきた 14 年間から「本人の意欲は見えにくいから、これかな、あれかなという、言葉にはならない感覚を大事にする。正解がないからこそ、白か黒ではなく、グレーを大事に、枠をつくらず、人対人でかかわってきました」と語ります。説得や誘導ではない「対話」を重ねていった「時間」の積み重ねに、「人」が見え、「信頼」が生まれる。よりよく生きたいと願う、生きる希望を見つけ出す支援の根っこにあるものを本人の視点から考える場になりました。（コーディネーター 上田理香）



他にも、ここには、掲載しきれない、対話と学びが多くありました。
「自律」につながる、本人の意向を大切にした支援とは何か。
オンデマンド視聴でご一緒に考えていただけたらと思います。
【9 月 10 日から 1 か月間、オンデマンド配信を行っています。 配信中も視聴申込を受付中です】 https://shiphiki.jp/2025/08/01/4396/

第５回予告　家族相談・家族支援に携わる方、ご家族の方、必見です

【丸山さんの対話ゲストのご紹介・講座詳細はこちら】 https://shiphiki.jp/2025/08/21/4484/

第6回予告　ハンドブック委員の林恭子さんが登場します。

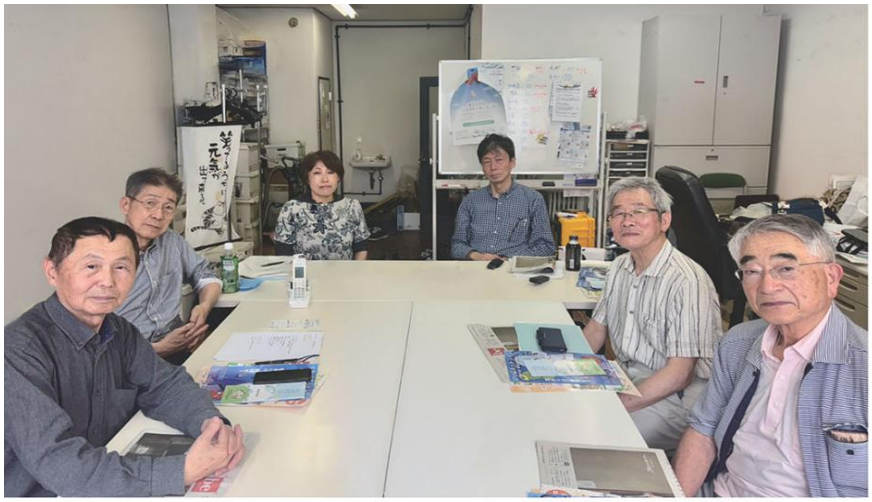
【林さんの対話ゲストのご紹介・講座詳細はこちら】 https://shiphiki.jp/2025/09/08/4561/

「全国の家族会で『おやじの会』を開く会が増えてきました」

「夫婦で家族会に行っていたが、多くの母親の話を聴くと肩身がせまくなった。代わりに『おやじの会』に参加した。父親同士で話しているうちに、自分には自分の考えがあったが、それは子どもとは違うんだということがわかってきた。本人がやりたいようにやるしかないと思った」　（60 代 父親）

【SHIP！第 2 号　昭和の父親たちの本音から、社会観の違いを考える】

「仕事人間」だった昭和の父親たちが本音を語る
いま地域で活動していく思いとは？
ひきこもり家族会・父親座談会



全国にあるKHJ家族会の父親たちが一同に介した。東京都豊島区巣鴨の本部事務所にて

外で働くのは父親、家庭を守るのは母親。昭和の高度経済成長時代を経てきた父親たちは、子育てを母親に任せ、仕事一筋に生きてきた。経済優先の縦社会の価値観から脱却し、地域共生の輪を広げる父親たちに、いったいどのような変化があったのか？　KHJ全国ひきこもり家族会連合会（以下、KHJ）で、長年活動している昭和の父親たちが、いま本音を語った。

聞き手：KHJ広報アドバイザー　『SHIP！』発行人　池上正樹　上田理香
構成：上田理香　　撮影：石井英資

参加者――

●**佐々木善仁**　ささき よしひと（75）
KHJ共同代表、KHJいわて石わりの会代表。東日本大震災の津波でひきこもっていた次男と妻を亡くす。妻の遺志をつぎ、当事者や家族のよりどころとなる居場所「虹っ子の家」（陸前高田市高田町）を昨年立ち上げた。

●**題佛臣一**　だいぶつ しんいち（69）
KHJ副理事長、NPO法人えちぜん青少年自立援助センター管理者、すてっぷステーション施設長。KHJ福井いっぽの会会長。みんなの居場所「まちなか亭」、「フリースペースいっぽ」（越前市）、「フリースペースいっぽっぽ」（鯖江市）運営。保護司。越前市議会議員。

●**中村彰男**　なかむら あきお（78）
KHJ理事　KHJ静岡いっぷく会会長。今春から「オヤジの会」や、信頼できる地域の支援者・専門家とのつながり「いっぷくネットワーク」を立ち上げ。

●**加藤峰生**　かとう みねお（74）
NPO法人あわの風代表、南房総ひきこもり家族会主宰。昨年12月、不登校ひきこもり当事者や家族と地域のつながりづくりの拠点として「open暖話室」を立ち上げ。

KHJ 全国ひきこもり家族会連合会は、共に創る歩みをテーマに
第19回 KHJ 全国大会 in 大阪を開催！SHIP も応援しています！

ＫＨＪ全国ひきこもり家族会連合会・実践交流研修会

第19回KHJ全国大会in大阪

共創

～「自律」ここ地域で生き抜く～

「自律」とは
自らの意思で
生き方を決めることが
尊重されること

２０２５年１１月３０日(日)

１１：００～１７：３０

会場：大阪経済大学（大阪府大阪市東淀川区大隅２-２-８）

プログラム

１０：２０　受付開始
１１：００　開会宣言・来賓挨拶
　　行政説明
１２：３０　～昼休憩～
１３：３０　基調講演
　　勝部　麗子さん
　　豊中市社会福祉協議会
　　「(仮)地域で生きていく」

１５：００　課題別会議(予定)
①地域でつながり続ける
②制度の狭間－８０５０・兄弟姉妹
③本人・家族の生の声
④支援ハンドブックから拡げる
　～自立と自律を考える～
⑤基本法はどうあるべきか
⑥ピアサポのつどい
１６：３０　課題別会議報告
１７：２０　来年度開催地から／閉会
１８：００　懇親会(別途、希望者参加)

参加費
一般・家族
３,０００円
本人・経験者
１,０００円
懇親会
３,０００円

つながろう!!

ＫＨＪは、１９９９年に発足以来、「ひきこもり」への社会的偏見に対して、家族、本人の切実な声をあげ続けてまいりました。
厚生労働省は１月に、「ひきこもり支援ハンドブック～寄り添うための羅針盤」を発表しました。そこでは、多くのひきこもり本人や家族の声に耳を傾け、社会が変わっていかなければならない、という「社会モデル」が謳われています。
ひきこもり１４６万人（内閣府調査２０２２）の現実に対して、ようやく、私たちの声が届き始めたのです。
今一度、私たちは、全ての人の人権を尊重し、誰もが生きることを諦めないでいい社会、「生きたい」と思える地域(ここ)をつくらなければならない、というＫＨＪの理念を再確認しています。

みなさんの力を、大阪に届けてください。共に、未来を創りましょう！

特定非営利活動法人　ＫＨＪ全国ひきこもり家族会連合会
本部事務局　０３-５９４４-５２５０　FAX０３-５９４４-５２９０
全国大会実行委員会　日花 睦子　０９０-６６７６-７６３７

創刊号巻頭「道なき道を切り開き続けている」勝部麗子さんが基調講演で登壇します！

公式サイトはこちらから　https://www.khj-h.com/news/convention/11067/